

# 深淵にみえる所にも温かい光がある

津守 真

三学期の末、私はやや手持ち無沙汰に、子どもたちがそれぞれにのびやかに遊んでいるのを見ていた。三月ともなると、ひとときではあるが、そんな時間が与えられる。私は、どの子どももかつて混乱の時期を経たことを思った。殊に今年、幼児期から八年も九年も私共の学校で過ごしている小学部を卒業する子どもが何人もいた。いまだの子も平穩のうちにいるようにみえるが、ある時期には、親も子も行き止まりの道に立って、生きる意味を見失っているようなときがあった。そんなときは親子共に本当に真剣で、私共も一緒になって悩んだけれども、やがてそれは行き止まりの道ではなかったことを、子も親も、そして私共も知った。卒業してゆく子どもたちを見ながら、それぞれの通った経路は

違いながら、どの人もこのことについては共通であると思った。そして、子どもたちの卒業にあたって、学校はどのような場であるのかをもう一度考え直した。

### 一、学校は真剣に人生を生きる場

子どもたちは、例外なしにどの子も、どんなに幼くとも、まじめに真剣に人生を生きている。私共は、学校の場で、子どもたちがそれぞれに自分らしく生きることを願う。たとえば、大人の観点からはふまじめに見えるときも、子どもは真剣に自分の道を探している。この子どもたちをかかえる親も、毎日、精一杯の生活をしながら子どもを学校に連れてくる。その真剣さに出会って、私共もまた自らの生き方を問い直される。日々遭遇するできごとを通して、自分自身にとっての本当の生き方を発見してゆくことができなかつたら、学校の教師の方が子と親に取り残されてしまう。学校はそこに集うすべての人にとって、自分自身が成長する場である。

### 二、存在の危うさを支える場

眼を八、九年前に転じるとき、たくさんの子どもたちが、自らの存在が崩れてしまうかもしれない深淵きわの際きわに立っていた。混沌の霧の中をさまざましているように思える子どもたちもいた。殊更に周囲の大人たちに受け入れられ難い行動をすることによって、自分がどん

なに辛い境遇に立たされているかを私共に知らせるように見える子どももいた。その子どもたちが、自分が存在する意味を見出すようになるのは、その危ういときを支える大人を必要とした。自らの存在が危ういとき、人は自分のことだけで心が一杯になる。そのときの思いは自分だけの幻想であることが多く、現実には、助けてくれる他人が何人もいるのに気付かない。そのことを発見すると、深淵の際と思っていた所が、温かい陽のあたる場所にかわる。次第に皆がそのことに気付くとき、そこは人々にとって住み心地のよい場所になる。教育の場はこのような意味で楽園である。

だが、一見平穩が訪れたように見えるその時にも、人は常に深淵のふちに立っていることにはかわらない。そこで危うさを支えてもらった体験をした人は、新たな危うさに遭遇するときに、もはや以前ほどに他人に支えられなくとも、自分を自分で支えられる者になっている。そして、次には、他人を支えうる人となる。これが保育者である。

### 三、今日を生きる場

保育者は、いま眼前に起こっていることに対して前向きに明るく取り組むことを、意志をもって選択する。そこから子どもと大人との両者の明日が創造される。過去へのこだわりはあっても、それは一時わきにおいて、新たな「いま」に取り組むことから次の瞬間がつくられる。また、だれにも未来への不安はある程度避けられないが、そのことを先にし

たら「いま」の必要が見えなくなってしまう。「いま」とどう取り組むかによって、過去も未来も変貌する。このことは、保育という、人生を凝縮したような場にいるとはっきり分かる。

私の学校のひとりの職員のご主人が、自分の経営する会社に都立の養護学校の高等部の卒業生を雇われた。その子はいろいろなことができるのだが、いつでも、この次は何をやるの？ 明日はどうするの？ と言って、「いま」がないからつまらないと最近私に話して下さった。養護学校の卒業生にとっては、就職という目標を達成すると、その点では成功者と言えるが、人生はそこが終点ではなくて、むしろその先が長いのである。教育の目標は、将来就職できるようにすることにあるのではなく、人生のどの時期にも、いつでもいまを充実して生きられるようにと考えることの方がより現実的である。今日与えられているものを、意味あるものとして受け感謝しよう。

#### 四、学校は人生の一部

私共の養護学校の子どもたちは、小学部を卒業すると、地域の養護学校や特殊学級に進む。これから進む学校では、子どもが自分らしく生きることを許されない場合があるかも知れない。しかし、初等教育の段階で、生きる基本を学んだ者は、新しい環境に興味をもち、それに挑戦し、そこに新たな意味を見出してゆく力があると思う。私は何人もの親た

ちから、この学校に中等部、高等部があったらどんなに安心かと言われたし、私もかつてそう思ったことがある。けれども、そうしたら同じような環境の中に子どもを囲いこんでしまうことになりかねない。むしろ、より広い社会に送り出して、親子が新しい世界を開いてゆくことに手助けする方がよいのではないか。障害をもった子どもの場合も、これからの時代には、今までよりも多様な生活の仕方が可能であろう。そして家庭を含めた生活全体の中で、子どもはどんな環境にも立ち向かってゆく力を一層身につけてゆけるにちがいない。学校は子どもの生活の一部であり、人生の一部である。学校を終えてから更に長い人生を、障害があっても成熟した人間として、一緒にたのしんで生きられる社会を作ってゆくことを私共の課題としたい。

八年、九年以前には幼児だった子どもたちが、早くも小学部を卒業して次の段階に向かうとしている。長い期間育ててきた者には、それ以外にはやれなかったという開き直りとともに、他方、不十分のまま途中で送り出すので、心配と謙虚な思いが残る。しかし、この後はこれまでのことをもとにして親子の選択によって切り開いてゆく部分が大きい。そして新たな危うさに遭遇するときには、また別の助け手があらわれるにちがいない。送り出した者は、その後はより成熟した、一層対等な者同士として、部分的な助け合いを必要とする時がくるかもしれない。そのときには幸いな再会となるであろう。

卒業する子どもたちを送り出すにあたって、この後、親と子が新たに遭遇する深淵の際にも、温かい光があり花が咲いているのを発見するであろうことを私は信じたい。

(愛育養護学校)

